

日本がん分子疫学研究会 ニュースレター

2007年9月

Vol.8, No.1

事務局：〒466-8550
名古屋市昭和区鶴舞町65
名古屋大学大学院医学系
研究科予防医学/医学推計・判断学内
TEL：052-744-2132

就任のご挨拶

名古屋大学大学院医学系研究科 予防医学/医学推計・判断学 浜島信之

本年7月12日の幹事会におきまして4代目の会長に選出されました。ご推挙いただきましたこと光栄に存じます。ご存じのように、本研究会は北川知行先生が初代会長として立ち上げに尽力され、2代目会長中地敬先生と3代目会長湯浅保仁先生が発展に大きく貢献されました。このあとを引き継ぎ、本会を更に充実させるという責任の重さを強く感じています。

1999年本会が設立された頃、既に分子疫学の有用性が認識されていましたが、今や分子を抜きに疫学研究をすることはできないほど、疫学研究の中に定着してきています。疫学研究の中で、生体指標は曝露の指標、疾病発生の中間指標、また疾病を定義するものとして使用されています。また、遺伝子型は遺伝的体質を区分するのに利用できます。特定の遺伝子型を持つ者で環境の影響が強く出る、または影響を受けないという現象(遺伝子環境交互作用)がいくつか報告され、遺伝子環境交互作用の探索検証は個別化予防の基盤を作る疫学研究として発展し続けています。

本研究会の使命は、会則にありますよう「がんの分子疫学研究の発展と会員相互及び国際間の交流を図ること」です。そのために、「学術集会の開催」、「ニュースレターの発行」、「その他、本会の目的達成に必要な事業」を行うことになっています。これまで学術集会とニュースレターは順調に進んでいますし、湯浅保仁先生はその他の事業として



AACRのMEGとの連携に努力されてきました。学術交流は視野を広げる契機となりますし、国際共同研究として異なる民族間で遺伝子環境交互作用を検証することは重要な課題であると考えています。欧米のみならずアジアとも連携を深めるため今後努力していきたく思います。

日本がん分子疫学研究会と日本がん疫学研究会が対象とする研究領域は、多くの点で共通しています。研究対象が人であること、研究手法が同じであることなど、多くの会員の皆様は相互乗り入れすることに違和感を感じていないのではないかと思います。2006年からは学術集会をともにしてきていますので、両研究会がともに発展することにも努力致したく思います。

どの分野でも研究のスピード

CONTENTS

就任のご挨拶 浜島信之	・・・1
日本がん分子疫学研究会会長を 退任するにあたりまして 湯浅保仁	・・・2
「がん予防大会 in Tokyo 2007」 を終えて 樋野興夫	・・・3
がん予防大会 in Tokyo 2007に 参加して 末岡栄三朗	・・・3
第8回幹事会議事録	・・・4
「がん予防大会 2008/FUKUOKA」 のお知らせ	・・・5
事務局からのお知らせ	・・・6
編集後記	・・・6

が問われるようになってきました。疫学研究のように人を対象とした研究は人手と時間がかかりますが、それだけでは他の分野の研究者からの批判をかわす

ことができません。がん分子疫学研究を効率よくすすめるためには共同研究が有利です。本研究会を通じて共同研究チームが結成され、多くの成果が上がる

ようなしくみができるよう努力していきたく思います。今後とも、会員の皆様方のご支援をお願い申し上げます。

日本がん分子疫学研究学会会長を退任するにあたりまして

東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 分子腫瘍医学 湯浅保仁



さる7月12日の第8回学術集会時に開催されました幹事会におきまして、日本がん分子疫学研究学会（以下本会）の4代目の会長に浜島信之先生が選出され、今年の学術集会をもちまして、私は本会会長から退任致しました。3年間の任期を大過なく務められましたことは、幹事・会員の先生方のご協力によるものでありまして、ここに感謝申し上げます。また、会計及びニュースレターにつきましては、引き続き今井一枝先生と中地敬先生（放射線影響研究所）にお世話頂きましたこととお礼申し上げます。

思い返しますと、3年前の就任に当たりまして私はいくつかの課題を挙げました。まず、「学術集会の共同開催」につきましては、2006年広島で日本がん疫学研究学会との合同学術集会が、

また2007年東京で日本がん疫学研究学会・日本がん予防学会との合同大会が開催されました。特に今年は「がん予防大会 in Tokyo 2007」と銘打ち、新たな方向性が出されました。来年も「がん予防大会 2008/FUKUOKA」と題して3会合同で開催されることが決まっております。この件につきましては、合併の可能性も含めて幹事会でも毎年議論しておりますが、今後本会会員にとってもよい形で決定されていくことを希望しております。

「外国との協力」では、ヨーロッパのがん疫学研究グループから話があり、協力の方向で皆様とも検討を致しましたが、相手方の責任者が変わり中断している状況で残念です。AACR (American Association for Cancer Research) のMEG (Molecular Epidemiology Group) との関係は特に変化無く、今後の課題として残されました。

「若手研究者の登用」では、新たな幹事の就任はありましたが、座長・シンポジストへの若手の積極的起用はまだまだのようです。本会の発展のためにもぜひ若手の登用を盛んにしていただきたいと存じます。

「情報交換の活発化 メーリングリストの活用」につきましては、現在もあまり活発とはいえず、活性化のための方策が必要ようです。

その他では、去年の日本癌学会総会時に本会の協力のもと、疫学研究について特別セッションを開催したいと考え、皆様にもお知恵を頂いて、日本癌学会会長にお願いを致しました。先方の理解は得られましたが、慣習上の問題から実現には至らず、残念な思いを致しました。また、この機会をお借りして皆様に力不足をお詫びする次第です。

去年の広島での学術集会では、全参加者が船に乗り夜の厳島見物を、それも海側からしたことをありありと思い出します。今後一幹事として本会に貢献するとともに、少しは楽しませて頂いてもよろしいかなと考えております。

以上のとおりで、私と致しましてはやり残したことが多いと反省ばかりが思い浮かびます。今後は新会長の浜島先生のもと、本会がますます発展していきますことを心からお祈り申し上げます。

「がん予防大会 in Tokyo 2007」を終えて

順天堂大学医学部 病理・腫瘍学 樋野興夫

2007年7月12日（木）、13日（金）学術総合センター（東京都千代田区一ツ橋）で、第14回日本がん予防学会（会長：若林敬二）、第30回日本がん疫学研究会（会長：山口直人）、第8回日本がん分子疫学研究会（会長：樋野興夫）による合同大会が開催された。3学会合同は、初めての試みであり、時代の要請でもあることを強く予感した。

「吉田富三、中原和郎先生等は真性癌研究者でした」の言葉が身にしみる今日この頃である。逆に何時の時代も本物は少ないことの現れであろうか。以前、「確信を持った人の確信によって、私も確信に入りました」と

述べている文章に触れ、感動したことを覚えている。これは時代を超えて本質を突いた人間の性（サガ）であろう。まさに出会いの原点がここにある。

「くりこみ理論」で1965年度ノーベル物理学賞を受賞した朝永振一郎博士（1906 - 1979年）は「ふしぎだと思うこと これが科学の芽です。よく観察してたしかめそして考えること これが科学の茎です。そして最後になぞがとける これが科学の花です」と述べている。ちなみに『中間子論』で1949年、ノーベル物理学賞を受賞したライバ

ルの湯川秀樹（1907 - 1981年）は、「未知の世界を探求する人々は地図を持たない旅人である」と表現している。

「似て非なるもの」に振り回されない「洞察力」、「胆力」と「具眼性」は、物事を究め尽くす地道な「真性研究者」の「練達と品性」によって獲得されるのであろう。

がん対策基本法が施行された今年、時代に生きる「がん予防の青写真」を高らかに示す時であろう。今回の合同会議で「研究の向かうべき目標と、進むべき道筋」が明瞭になったことを切に期待してやみません。

がん予防大会 in Tokyo 2007に参加して

佐賀大学医学部内科 末岡栄三郎

7月12日～13日の2日間、東京学術総合センターにおいて第14回日本がん予防学会（若林敬二会長）第8回日本がん分子疫学研究会（樋野興夫会長）、第30回日本がん疫学研究会（山口直人会長）、の合同学術集会、がん予防大会 in Tokyo 2007が200名近くの参加者をえて開催された。2006年に行われた、日本がん分子疫学研究会と日本がん疫学研究会の合同学術集会についてがん疫学、分子疫学、がん予防というそれぞれの学術テーマが議論の場をひとつにして質疑を行うという全く新しい試

みである。来年度2008年もがん予防大会／Fukuoka 2008が開催されることが決まっております、このような取り組みは研究者だけでなく一般の方々からの反響も増えてくることが予想される。

さて、本年度の学術集会では2つの合同シンポジウム「がんのハイリスクグループに対する有効な予防方法」、「がん予防におけるがん検診の役割」が企画されたのに加えて、今年初めての試みである市民公開シンポジウム「がんの原因

と予防法：アスベスト、ピロリ菌、肝炎ウイルスについて考える」が実施され一般の方々との交流の場も設定された。合同シンポジウムⅠ「がんのハイリスクグループに対する有効な予防方法」では家族性大腸線腫症と神経芽腫の予防対策が紹介され、大腸がん予防介入に対する内科と外科の考え方の相違、遺伝性疾患に対するマス・スクリーニングの難しさがクローズアップされた。シンポジウムⅡ「がん予防におけるがん検診の役割」では、がん検診の方法、制



度管理、検診受診者に対する意識教育を含めた働きかけなど多くの議論すべきテーマが示された。一般口演では合同学術集会ゆえの多彩な演題が発表されたが、なかでも清水憲二先生が示された SNP の網羅的解析とその臨床応用への展望では、これま

でモヤモヤしていた SNP の解析の意義とがん分子疫学における分子ツールとしての有用性を考える上で非常に示唆に富む発表であり、質疑の時間が足りないことが残念であった。

昨年のがん疫学研究会とがん分子疫学研究会の合同学術集会では、テーマが近いこともありそれまでのがん分子疫学研究会の内容に相違を感じなかったが、日本がん予防学会との合同となった本年度は内容において大きく異なっていた。私のようながん予防研究から基礎研究に入った人間においてはこの違いを大きな違和感、問題とは感じなかったが、研究対象、

目的がかなり異なると感じた参加者は少なかったようであり、いろいろな意見が水面下で交わされたと聞く。このような意見が前向きに検討され、来年も予定されている合同学術集会がん予防大会／Fukuoka 2008 のテーマ設定、運営等に生かされることにより、医療従事者のみでなく一般の方にもわかりやすいがん予防の実施につながる話し合いの場となることが期待される。

第 8 回日本がん分子疫学研究会幹事会議事録要旨

第 8 回日本がん分子疫学研究会幹事会議事録要旨

平成 19 年 7 月 12 日(木)–13 日(金)東京にて、第 8 回日本がん分子疫学研究会(樋野興夫学術委員長)・第 30 回日本がん疫学研究会(山口直人大会長)・第 14 回日本がん予防学会(若林敬二大会長)による合同大会「がん予防大会 in TOKYO 2007」が開催されました。12 日に幹事会ならびに総会が開かれましたので、ここに幹事会の議事内容をお知らせ致します。また、幹事会での報告内容と決定事項はすべて総会でも承認を受けましたので、ご報告致します(事務局)。

日時：平成 19 年 7 月 12 日(木)
13:00 ~ 14:00

場所：学術総合センター(会議室 203)

出席者：菊地正悟、北川知行、

古野純典、酒井敏行、清水憲二、末岡榮三朗、園田俊郎、田島和雄、津金昌一郎、中別府雄作、浜島信之、樋野興夫、森 満、湯浅保仁(司会)

記録：秋山好光(東京医科歯科大学)

1. 平成 18 年度活動報告

1. 研究会活動報告

(1) 中地敬学術委員長のもと第 7 回学術集会が、平成 18 年 5 月 20 日に広島で開催された。(2) ニュースレターが 7 月(Vol. 7 No. 1)と 12 月(Vol. 7 No. 2)、合計 2 回発行された。送付数は 7 月号が 160 部(内訳はメールによる PDF ファイル送信数 116 部、(郵送 44 部)、12 月号は 164 部 PDF ファイル送信数 119 部、郵送 45 部)であった。また、会員名簿が 12 月に発行され、160 部送付された。(3) 湯浅会長より、メー

リングリストは適宜更新したことが報告された。(4) ホームページは菊地幹事の担当で、適宜更新された。(5) 平成 19 年 3 月 31 日までに新入会 5 名、退会 6 名、休会 1 名、法人会員 1 名あり、会員数は合計 160 名(159 名 + 1 法人)となった。また、4 月以後も 3 名の新入会があったことが伝えられた。

2. 会計報告

平成 18 年度の会計報告(浜島、清水両監事による監査済み)が行われ、原案どおり承認された。

3. 平成 19 年度予算案

湯浅会長より平成 19 年度予算案が提示され、原案どおり承認された。

Ⅱ. 役員の選出

1. 会長の選出

平成19年度学術集会終了時に湯浅会長の任期が満了となるため、次期会長の選出について協議が行われた。新会長として、浜島信之幹事（名古屋大学）が推薦され、幹事会で承認された。

2. 任期満了に伴う選出

浜島監事ならびに樋野編集担当幹事が任期満了となった。新たな担当者の選出について協議した結果、新監事には古野幹事が推薦され、編集担当幹事には樋野先生に継続して頂くこととなり、幹事会で承認された。監事：清水幹事（継続）、古野幹事（新規）
編集担当幹事：末岡幹事（継続）、樋野幹事（継続）

Ⅲ. 平成19年度の活動方針

1. 次期学術集会の日程について

中別府雄作次期学術委員長（九州大学）より、平成20年度（第9回）学術集会の日程が説明された。

期日：平成20年5月22日（木）、23日（金）

場所：九州大学医学部百年講堂（福岡）

中別府幹事より、次期学術集会も本年度同様に3学会の合同学術集会で行い、「がん予防大会2008/FUKUOKA」と題して開催されることが報告された。尚、平成20年度の日本がん予防学会（第15回）と日本がん疫学研究会（第31回）の学術委員長に、古野純典先生（九州大学）が決定している。幹事会では第9回学術集会のプログラムの概要などの説明があったが、具体的な内容は、現在検討中であることが報告された。

2. 次々期学術委員長の選出

次々期（平成21年度）学術委員長として、菊地正悟幹事が選出された。

3. ニュースレターおよびホームページの方針

ニュースレターは例年通り年2回とし、ホームページもこれまでと同様の予定であることが承認された。尚、ホームページ更新は、菊地幹事に引き続き担当して頂くことになった。

4. 他学会・研究会との学術集会の共同開催・合併について

樋野学術委員長より、今回の合同学会開催の成果について説明があった。

共同開催については、必ずしも毎年合同で行う必要はないが、次期学術集会（福岡）など今後も数回行い、その上で将来の方向性を決定していくこととなった。合併については、各会の違いや共通性が議論されたが、引き続き協議することとなった。

がん予防大会 2008/FUKUOKA

第9回日本がん分子疫学研究会

第15回日本がん予防学会

第31回日本がん疫学研究会による合同大会

第9回日本がん分子疫学研究会を、第15回日本がん予防学会および第31回日本がん疫学研究会と合同で下記のとおり開催いたします。来年のことですが、日程の確保をお願い申し上げます。

会場：九州大学 医学部 百年講堂

〒812-8582 福岡市東区馬出3丁目1番1号

会期：2008年5月22日（木）～23日（金）

第9回日本がん分子疫学研究会	会長	中別府 雄作
第15回日本がん予防学会	会長	古野 純典
第31回日本がん疫学研究会	会長	古野 純典

日本がん分子疫学研究会事務局連絡先の変更

平成19年8月に浜島信之先生が新会長に就任されたことに伴い、事務局の連絡先が変わりますので、よろしくお願いいたします。

新しい連絡先

名古屋大学大学院医学系研究科予防医学/医学推計・判断学内

住所：〒466-8550 名古屋市昭和区鶴舞町65

電話番号：052-744-2132

FAX番号：052-744-2971

E-mail：jscme@med.nagoya-u.ac.jp (但し、10月1日より)

編集後記

肌寒いような朝の風に目を覚まされるようになり、酷暑というべき佐賀の暑い夏も終わりを告げつつある。体はとても敏感でこれまで冷たいもの、喉越しのよいものしか受け付けなかった食欲が一気に回復してきた。秋の到来である。外来を担当している立場としてはこれはまた悩みの種でもある。生活習慣病、メタボリック・シンドロームと戦う患者さんにとって食欲は敵(?)であるからである。最近では外来患者さんの、がん予防、健康志向、食育への関心は高くさまざまな質問が飛び交う。「ウコンはがんに効くと聞きました。」「プロポリスは?」、「黒酢は?」、「酢大豆は?」。私たちががん予防研究に携わる人間はこのように問いにどれだけ情報を提供でき、的確な答えを用意できるだろうか。がん予防大会 in Tokyo 2007はいろいろな方向からがんの予防を目指す研究者の集まりであり、一般の方々やがんを患いながら再発を予防し完治を目指す方々への希望の学会であったとも思う。今後も研究の場からベッドサイドへ、わかりやすい情報提供をし続けていただきたいと願うのは私だけではないであろう。そのひとつの場所としてニューズレターを活用していただければと思う。(末岡)